朝夷巡嶋記

初輯

五

へ13
3568
5

早稲田大學圖書

朝夷巡嶋記全傳巻之五

東都　曲亭主人編輯

初輯第九　朝霜乃庄司暖　夕立也許我郷

阿三郎ホが住ひぬる大猪の浅江より。船堀圖内が宿所まで。十八九町が程にして中間に庄司暖あり。大猪ハ和名鈔國郡の部にみえて朝夷郡にあり。今ハ定かならねど地名に今昔の差別あり道路も又しかなるべし今ぞまさ推ものハ般に刻る類といふべし。かくて貌阿三郎ハそのほど母親と一三ふちち いませしハ今へも後世千日菴へ赴きてやがて纔仏を贅べき欸眼代が宅地へいたりて船堀ホを贅べき欸と且く門傍に立在て又つくとやうやう縡の起りハ纔仏なれども又の枉死ハ船堀が残酷の筆楚によりてなり。めさ又目ざし

門 へ13
號 3568
巻 5

早稲田大學圖書館
昭和34.6.3受
藏書

敵ある圖内を離れて後にて神仏に祈り復ん事をつゝむ。と肚裏に尋思し。瞻仰ば若葉の山梢をはなれてさし出る廿日餘中の月の暈。さしくゆくへは暇道おちえり鳴く杜鵑冥土と娑婆の二親をうけてぞ憑む神仏の冥助利益を祈念して。歩の運び疾いそがせば。庄司が瞬残をや過て讐の宅地に近づけば。築垣に身を倚て内の様を窺ふに門竿は寝たをやあらけん。窓の隙より火光漏て折くうちわらふ声も是さへ憎しと。忍び潜入る隙を求めて。背へ廻りて竊に後堂近くしのびつ。筑紫琴の音を聴に中して。客の人の笑声をさゝへ時なれ。早毎けるまにつかさどる怪しめられ且く退きて更に扨かへんと浅江のかる人五六町立ち去前面より里人と覚しき男の両三人先に立て。ちち相撲ぞ来るなれば。物を怨ある女のやと見とどめ只一條ある縄をなしたれば避るにより。まつ綏忙しく宿は道次ともしら乏。片原なる家に添ひなる堂にやすらひけり。

且く休らひと思ひて縁に腰かけて路行人が遺る事は彼ならねは浅江のこころとなく此処は深澤乃荘容ちなき此日眼代の夫役にとられて夜を更して還ると聞しかば人跡は漸くに絶て前の磯の残る所もなく時は更けれ共鎮りてさしも有る月影は奥なる気よく見れば本尊は石の不動なり。その上に阿三郎が何かに記せし百年来日本に在り。この明王の仏は其年は幾遍となく過ぎしかども有繋に思ひ企て念じしけれあはれ可苦しきときの神詣と世話にいへるは故あることにて今宵ここに立寄しも仇人を狙ふ志しつゝありて思ひみざれば不動は釈迦なり大日なり。日は陽徳の母にして萬物是によりて成就す降魔の利剣縛の索像見の刄も倶利迦羅丸給ひと言ひ恰も此の明王の擁護によらば仇を撃事やすかるべし。或人の云原この石像は日本武尊の右の手に持せ給ふ刄は草薙の剣その左の手に持せ給ふは列来縄也この尊東征して駿河国まで下らせ給ひし時暴夷どもは将て欺托計りて誘引奉り。

義に火を放て火攻んとしけれバ尊ハ腰なる燧をもてむかひ火を焼つけて十束の御剣を引抜て草を薙はらひしかバその火ハ仇のかたに移りて夷どもみな焼殺さる。因て件の宝剣を草薙と名つけ給へり。この時の御姿をうつして摸しなり。上総国に祭祀る橘媛の神にむかひてこの神祠を建られし。神體不動に似させたまひぬ。彼本地なる大日と日本武の日と相かよへバ本地垂跡の義をとりて今ハ不動と唱るよしなりされバ満禄寺にあるよし老師の夜話に聞えたり。日本武ハ弓箭の祖なれバ武門の守護神にて神仏その義ハ異なれども何まれ今まで宜助の外骨をめぐし給ひて輙く仇を報せ給へと丹精を抽て祈念に時をうつせバ程遠寺の鐘声幽に聞えて夜も子の時になりたれバ今ハよき比なるべしとて外面へたち出ますバいつの程にか矢結陰て月の鏡もうちくもりたるに便宜をえたりけれ。かくて又恩雄が門前へはせゆくに今ハ更ゆくほどに琴の音ハとだえしもまよく聞えて。笑語の声絶ず

時なりし。この体ハ夜を明さバ再び志のびよるも難し。いかにせんと思ひかねたるおりから頻に早まで今さらに耐かたけれバ晴れ処に身を屈めて仇の睡るを俟ことさ浩処に世渡のため夜を更て油断せず長櫃を一荷にして燈火ささえて打擔ひ声よく冴る商人が蕎麦をめされバや間酒もいと呼かけつつ眼代が宅地の辺を過るにかねん。門卒ハ窓の戸を細めて引用て。こやくと召すがら。当時うち鼓て二度あまりに過ぎては。おのが呼声もかけまバ内外のえせず。燈火も鳥夜の嵐に遠離まバたうちくのをとこゑ焦燥て彼耳ろし奴が令雪喚ひかく翌沽る酒欲と罵つ。堪ざりやありなん枢戸をば遠く推開て身を横ざまに閃かし出るをすこととらちちるかち一町ばかる追蒐さり。阿三郎ハこの光景にそれぞれも隙をみて神明仏陀の冥助なりとおもひつつ祝して。件の奴隷が遣りし一つ潜ひ入るに。前面ハ文注所なるべし。障子の内に鮮明の燈火の光をえ左右のかたへ庵温と思ひて。折から—

とは板屋あるべうの奥へ遠うまかりさうらとく足弱翔く右よりと進ぶ果せうるる
柴垣あるとこの孔戸あるとこの孔戸あるとこの孔戸あるとこの孔戸あるとこの孔戸を
推とふ。さとりたる庭あり池あるとこの孔戸あるとこの孔戸を
ゆく人濟びよるべ横室あるとこの孔戸あるとこの孔戸
まふ八九人いく醉ふ声ざわめく夜へ更ち婢ども盃盤をとり納めよ。
舟を漕ぐ女の童ふ起とく琴を踏折るるといふ圖内へ阿三郎が縁類ちる
羅漢杯のほとりふ隠れて内のゆく紙窺へべ婢ども紙へ行きとく寝ふ死ぬ
ふ圖内へ餘炎尽きぬやあるとえん。五六人囲坐しとうち煙ふ紙つかく笑ひ囲ぶ
冢子藉堀小頓太ぞ丈藉堀小頓二十日菴の女僧泡仏。私率切平決攻ふ主役
まべく六人ちる土當下國内へ剛剛しく扇柏子をとるとうぐら朔旅就温ふ紙ぶ
呼とうち笑ひ泡仏ふ何とうぐる人淀江の豊六を結果さく汝ら怒と復くる計兼

妙ふ汝ら怒ぶ威勢めく憎しとふ奴ふりとも罪ふ殺さるべ。ちふと其く
絶対て盗賊ふ者るべをを綱ふ汝ぶ汝ふるるとも。ふぶ私の沙汰とせるとべ
今宵の吉酒。ふぶ子小頓太ぶ延辰を兼く汝を壽ちふかぶるとふ楽ちるの
ふ。紙しく。ちるとや。とのへべ泡仏うちわ笑を寝ふ刀祢の出庇ふ因て
ふ刷く口強ふる仇を報ひ恥ぶ雪め。紙べ三の禁ふ近付るとも竭しとふ噛切
平他ふ出ひ者ふ少他ふふひそとのひふふ子をふんふ人ふべそふ寅ふ
までもひふ年来母を安楽ふ養ふ者ふ某ふ威徳ふ荘客ふ紙
きげふふ大刀祢の御恩ふ加護新美の決攻をとふ某ふ落ふ
あるとふ竹馬の友ぶいへべちふ比刀祢ふ清ふしく。ふ紙御内へふ世
ふ公のふあるせふ彼使者をちふ紙せふ通愛ふをとふ哉とのれふ決
双鬼ふ新ふあるふとふ切平ふ友ふ紙とふ紙とふ紙とふ紙とふ紙。

駿へいまで荘客們に面を識るものなければ。この密計を行せん。箇様々々にせよ
かしと示させければ。みな〳〵承りて平群薛平と名告りて豊六が宿所へ赴きけるに
かの母ハ孰しらず吁是ゆゑなくあまりと鳥鳴呼めきせしが死仏を出の事へど
嘆息し。まことといへど今更にせんかたなく豊六が妻とその子へ恙なく〳〵。
聞ける浅江村にある力称むらすこぶせる者や。彼豊六が一子ハ其の名を阿三
と喚るる年ハ十六七なれども身長ハ六尺なるに筋骨の逞しげなるは
相撲とりともいひつべき大童なりけんが。此ぞ遠奴か尼をいて怒りて寺を
開きるあらべき身を知らぬ御宗にてし。と思へバ後母さどかくしさまとて寺へ還らず
ざらいぬ遠きところに待らん。よく計せよかしねといふは小頸太小琢二ハ小膝が
穀こうち矢ひ死仏が卿かにしく頑童むとるが。おそれとられと互に。のるもを
コが大人が漿よりと慮りて竊に人が遣しく。彼大童を向せしかは、遠奴ハ武蔵の

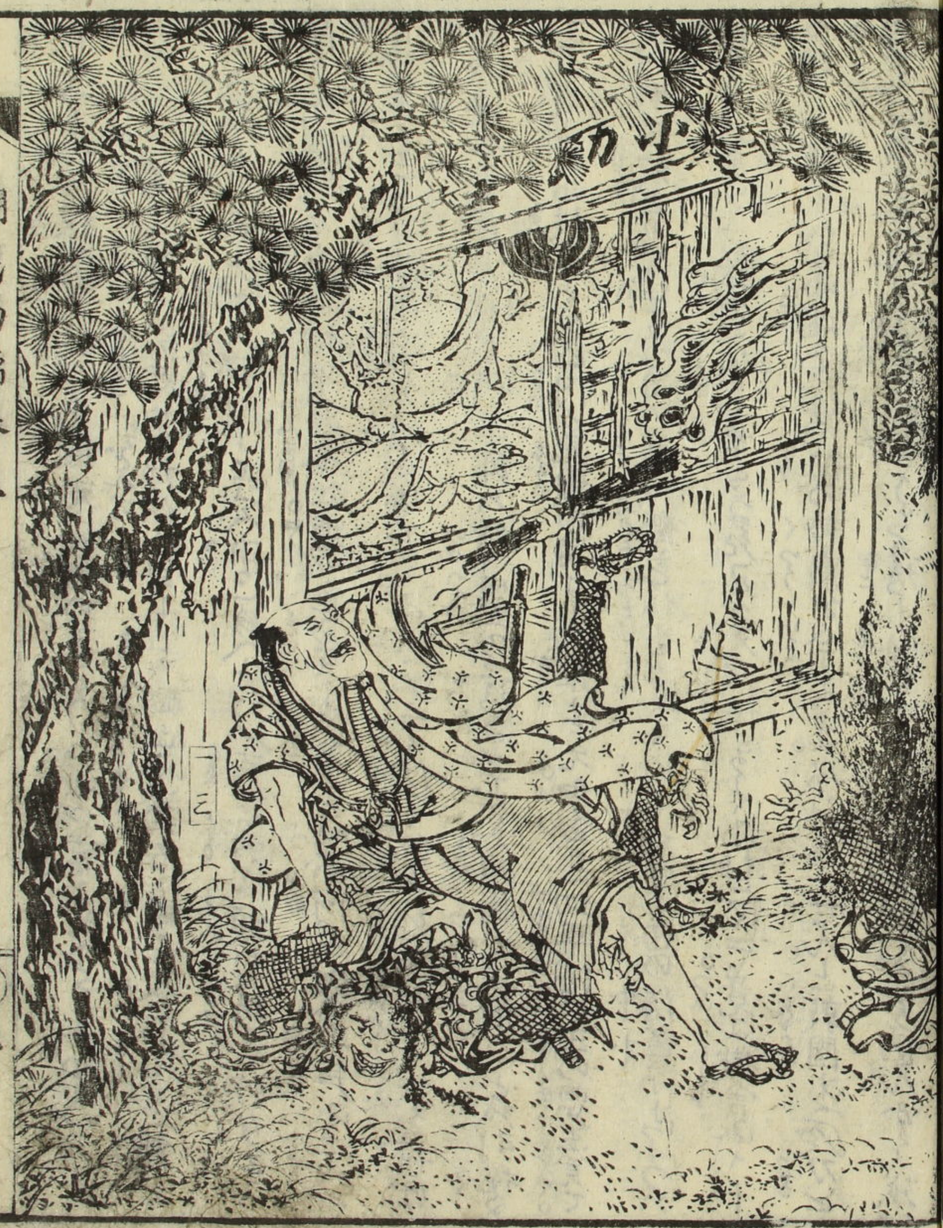
かくて八日五六日ありけるよりかへりしが遂ハ竊に告よりと村長に命じ多人で搦捕ゑ
遠き尼親に赴きし盗賊の科が員しく獄舎に繋ぎが捻り殺さもいと易かり。
と覆ひまで頭が磨原来根が劫子がが枯らし後の鬼が除んとすゑも討せる人に
けりしかくまで御庇を蒙る王禍禍の中より和子達は乳をまゐらせ餘瀝に哀ん。
あよる尼が幸えといひて笑ハ頬の皺むとんすよるが推延し圓かる目を細く
まして。あるが我ハ居り声し。現き畏の乳母優婆夷と互も昔の餘波あり阿
三郎ハそれより後は園内ホが姦計一五一十を告く暗ず或ハ怒り或ハ歎び、肚裏に思ふ
ずり。園内が弑せとも死仏を漏さず遂根なきべき。今宵の圓居ハ尼のことおのらぐく。
彼切平ハ己が父を責殺しろ讎者なり。又決及と唱て奴ハ己が母が弑討て。
銭を贈り、薛平之加る小園内が子ども小頸太小琢二ありまさに漏さじとこの六人を
殺し弾が養親の亡魂を慰るに足りぬべし是ぞ二田夜ハ祈りし。明王不動の

冥の助あらざりと。定め賤しく塵浄手して燭台のもとに近付一刀の鞘を湿し了て。
あらぬ佛の名を汚さし純仏ハあさしてこの比の夜の短さよ丑三刻や過つらん又
杭ハ假寝あそびと彼臥房へ入らせ給ひ程といふ圏内ハ起あがり彼への愉く
酔ゆあり子どもらとみれて寝ぶみねて休めと眼掛の刀を取てたちあがる。
前面の障子を蹴ひらきて跳入る阿三郎ハ主従齊一驚としく。ちハ狼藉なる。
何ものぞ不覚よ命を捨ぬ来つる半熟の偸児なるらん。といへども果ぞ信と疾視好
賊ども。立るさらぞ酷吏ハ虎よりも暴しといふ古人の言まことに故ある罪あつう
あつく獄舎に繋れ非法の呵責に命を隕せし。豊六が由なる子阿三郎を識ざるや。
人指て賊といふ汝ホてそ民を掠め仏を賣て施物を促さ四頂衣冠の偸児なるよ
己ら五七日旅寝して立る人と悉蕫里の親の枉死ハ女僧純仏と眼代圏内が毒
悪の謀にあるよしをしらず實晴も讃ずまい。いろく報んとて潜び入りぬ

彼ら汝が向ざりけり。伎倆ハさそく皆果ぬ彼も此も脆さんや。圏の為めに好ぞ
勘死親の為めに讐をば撃刃を受よと罵りて圏内ハ子共と切平木に目を注して冷
笑ひ土百姓の子の分際で威徳領主に敵して死吾脅ぞ。仇とし寃ぞ蟷螂が斧
のくるまにむかふが如し。かぞえて嗚呼なる白物よ眼ていせる撃をとまて今に幾か
切平決めて組んとよるを引つけて両手に衿上撥て一反あまり投退ぞ侍の二
人ハ礫を打とて。雲時ハ起もあらざりけり。猪堀親子ハ二方勇力に舌を掉て進
みぞ頓に人なしとてよぶ阿三郎ハ憤怒と俱利迦羅の刀引抜て圏内を目がけて
飛かる勢ひ当りがたくぞも。有繋に親を撃せじとて小頓太小弥二遽しく
ていそ洗紫琴が角にもして遮り留めんとすもに刃を晃めかし抜あはせ両三合戦ふ
程に圏内ハ子共が撃せじとて刀をうち揮力を戮して鋼を削奮撃突戦
三郎ハ三方に敵を受て物ともせず秀作が傳へたる。鞍馬の兵法術を占で

石火と閃き刀尖を拄く孤と成り籠堀親子ハ小髮肩先浅痍西五人丸負ぬ者なくそや
受大刀ハ二つ三つ一人迷迷ひ寄る純仏も脱き捨てぬ阿三郎ハ後方ハ矢
庭ハ歴々頑者く弯倒さんと走るまど野中ハ高老松を抱き居ようハ
見く動きとゝ引ろ〻ハ放く逃んとき居ハ阿三郎ハ足弦飛ー〻後ざるこ
磯と蹴る磯く〻て苦と叫ひ来ぬ純仏ハ班な面板歯を脱ー鼻と吹ぬて澤と
流る血ハ煎蘇枋の樽溢く。簀子と深居ハ異るくど親子ハいもく大力こぢ
乱さく逐巡と居のこるまぶ阿三郎ハ猛虎を駈く群羊を逐ふごく頓て進ぐ
小頓太をだくまぶんと砂仆ー。刀ハ国内ハ眉間を刀尖ふく丁と砂ふ英
所ハ乱ハ雲時ハ沼猛ハ尻居ハ撞と倒る我足下ハ楚と蹂躙ハ驚ハ劇居
小玲二ハ刀と裏哩と敵意ー〻く。左ハ我伸ー機鋼を矢声をうけく投ー〻小玲二ハ
筋斗く。柱ハ野我ち神ハ職後出く死でけるハ又彼切平決ハ大力ハ投ら

一且息ハ絶ハ〻ハ辛ー〻く高死ぬ。あとハ死ぬ居ハ郎く痛ハ筋
縮ハて。逃べ〻ハ〻ハ陽滅ハてぞいくりける。阿三郎ハこのハ我尻目ハ
かけて踏居ハ居。国内ハ些ハ動ハ引揺ハ居血刀ハ〻ハ敵ハ敵ハ奸賊
天罰ハ〻ひ〻ハ。よハ四郡ハ主ハ居ハ〻ハ昊則民ハ父母ハ又ハ主ハ代ハ居ハ
汝ハ〻ハ民ハ居ハ婢母ハ〻ハ賄賂我綸ハ〻非法ハ行ひ公道ハ藉く
私欲我恣ハ良民ハ虐げ幸ハ我殺ハ何ぞ民ハ徐母ハ居ハ白刃ハ
猶ハ今ハ〻ハ猶遅ハ〻ハ。冀ハ養ハ精霊ハ向ハ受く三熱ハ苦我ハ
散ー〻弥陀仏〻〻と唱ハ〻ハ食ハ居刀ハ内ー頭ハ農石ハ〻ハ我ハ。純仏ハ戦慄
ハく。綱ハ敗ー〻ハ居蜘蛛ハ〻ハ我張ハ尻ハ高く慌忙ハ逃ハ居我
阿三郎ハ跳懸く項ハ〻ハ極く撲地ハ引ハ〻ハ賊尻ハ〻ハ死ハ〻ハ縛ハ
起ハ〻ハ汝ハ逃居ハ〻ハ脱ハ善ハ報ハ〻ハ悪ハ〻ハ善ハ悪



阿二郎復讐を図り明小夜四の巻之五

報あるべし殺せば又殺さる。輪廻応報のことわり。汝が常ごとくこころかろかるべく
なるべしと罵り詰て引起せば泡仏ハ目もくらみ口も血ふき塗る手を合し項を縮め
刀を戦し衷しや大音揚げて叫ぶと共に頭ハ落ちけりそぶ
隙に稍四跋さ逃る切平決死を遣りをさまど等と呼ぶ阿三郎が一声ふ二人ハ
耳我先にて青茲小塩を被せ奮ひ。あるべきと伏て動ぬるを且く鼓を撞げ。
再び逃んとせしを阿三郎ハ霹靂の落るごとく飛掛て木偶ごと我引提る
ごく後ざまふ投えしく國内が死骸の尻とを推さえ切平汝ハ主の悪を資て
民の脂を絞とりしかその身の罪我顧ざ仏を賣て俗を惑せし母の隠慝ふさろハ
るつぐをさく私情を挾む事もうるこぶ我儘まぐふむごて竟ハ獄舎ふ
るひさる報ひいふ速ふ汝や我の苦痛を今すぐ必ひきせんと敦圉あ刀を
内ぶとりとるべく右の腕をうち落し。汝且く苦痛を忍びくこぶせんやう我

こそようとのひんく磯と蹴倒せば鮮血濺と濺り。果酒の樽の吸口ぶ。ち拂ふふ異ふ
共ふ刃の下ふ伏ふ決死ハ魂死ぶ。辟るごとく。死せるが如く。歯の根ハあらぶ戦ふ声
高く神仏を只願祈念ふ。阿三郎冷笑ひ神明仏陀ハ善ふ與ふ
極悪の人我清ふ。この期ふ及ぶ何我ふ祈ふる汝ハ主の密謀を義て平群萍平
とふ假號しく。ふ我陷ふ。己が悪吉我殘貞ふ口ふ我窮ふ。
我奴ふ主の黄泉の倶我しく。冒瀆の聽を聞せと罵ふ責ふ頭ふ。
小玲二示が頭と刎ふ。我ふ引ふ。國内泡仏ふ共ふ五ふの首級我ふ。
件の棚ふ乗ふ刀夫をのふ傷の壁へ。

酷吏啖民其暴甚於狂狼然尚逃刑書賊尼
惑俗其妖類乎狐狸而弥見尊信父因茲枉
殂母依此淌落雖怨懟斷腸無由告訴官遠

而民情不通缺望蹉跎耳。豈忍崇讐哉憤然
磨刀。報怨雪恥。俟罪於寒郷之外。官使不曉
問誰。六頭當開口苔渡江阿三郎。
と書すてくりるぐり刀をとりく切平式さ一招いくふ賊僕を殺すとりやさとび暇を
とりせん。といひて躍く鼓髻を抓き引掴よせて頭を落し。足を棚ふるべきそえて
夾衣の裾を折く刀の鮮血を推拭ふく。ぎくふ鞋を履まび燭喝んとして忽地暗く
庖湯のくふ鷄時くそや曉よりまふけて間より出くふ母屋へ退く。隅さるのれさる
便室ふまびいぐさるを奴婢ふさん。文注所のほとりふ沙る。艦堀が駅兵示も
ふまび式考るよりなる思ふび阿三郎ふ少ぐまるふ親の仇人を殲く。縁頼を内と
ふを。庭門ふる走去ふよる。ぐくふ憚ぐど初め入さる角門の篝燈式一米離く。
門扇推開ふんとまびふ門率暖北覓岸破と起つ六尺あまりの樫式挾を。
癖者等と呼ぶけくそも外面へ出さりける。阿三郎式追蒐来ら手倒さんと内くと。
棒を外しく大地を撲せ。又振あぐまび衛とりの甘く棒を奪ふく向脛式拂へび奴
隷へ郎を逆さるふ門のほとりの大溷へ泥水飛して火と墮ある疼痛と養蝕けび
阿三郎へうちふ火ひ棒をも溷へ投棄く。甲夜ふ祈アキ不動堂のほとりまで
かくり来ら堂内ふ進ま入りまく。明王を拝ま一特ま輙く仇を報ぜしくまるひ威神力を
謝しまり。ふ張の刀さ文ふ丹精祈請他へのもなく某り時と成るく。四の角ふ
ちる式盡。功成ア名遂く一郡のねしとるるふびたまりしく。遂さふ地を領まび。
さふとまへやひの隨ふ堂宇式修覆しまり。ふ猜るよりまを
ふまるふ式や。と誓約く郎を起し。ふんとまびいふの招ある追蒐来つる艦堀ぶ。
駅兵四五人不動堂の左右ふ伏く張ひをア阿三郎が出る式とく。牛も遣ふび
もろ声ふけく。雄ア唯ア与ア楚と組ひ式組せまるふ死をりい郎を沈しく揮

鮮を抗ふ暴を双方奔一瓦を隨ふ落ちの如く一人は石の弾は盤一人は樟の伐株を
投つけられて骨碎け叫びも為ずに死ぬけるを見ゆるまでまるが捕んと
隙を窺ふ勢を窺ふ阿三郎が引抜く刀は明王の神威をいやまし俱利迦羅丸鞍
兵を待の家朽て両人矢庭に砍倒さるひとりは残る疵を負て逃んとする
前面より菜を伐送を著暁うけて叫り来る一二は走り熙て焦火抗て佶と
見て阿三郎が抜と見るうと見て一三阿兼が怪我をするとて焦火を
口が銜て衣の裾を折て脱て迷ひ入て潜て脱んとする敷兵をそが侵楚と
騒まして母れの人いと易て見て見て逃るを見て
奔走て天は生憎が明烏反哺の孝が母の想像て阿三郎は
思人は一言の謝も暇なく道を往方まで走て去る
さる程が阿三郎は去ると数十町豫て水行船まで
戻の地及ずるほどに幸て霧ふて。咫尺の間とて見て追ものを
おろす浦人は朝霧の晴て船を出せんとせども彼此と津を求めて
漕行とて見れば磯馴松に船だと見て漁舟あるを夜明て人せるや
舟の中は割籠あるを番の内は雑魚も曲突て折焼く些は煙りを
湯を沸て漁又は四下に阿三郎は二瓦を引ひと遠く纜引解て舟に
内を乗て棹を操て乗出す朝霧晴て順風に総帆揚て走るこの
時いて餓て些の件の割竜を投て
餓が充ぬ骨揖を取て隨て舟は細小にして速く追風なりけれ
その呉暮が下適る行徳の浦に着て舟を乗棄て
屋に宿を投め寝ぬまに来て
仇人を捜て百三郎の眼代を主従六人まで

ござ後難はまぬかれくまじ。こゝろにかゝるは母の上なり。豫て徃方を定めずとも別れゆけば何処に在何国に候て再會せん。さるにても苦しきひとつは又彼恩人三阿爺數にて逢ひさんとて圖内の戦において桂ハ連係せし恩にてあやまん心苦しき二ツなり。加以健田大人に年来疎闊の罪をも勧解もなく況や家の艱みくらる迹濁を大磯の汀の雁の翅にも絶て別る恩を告さりし心苦しき三ツになん。去年あれども古の賢人の言の葉にも大信は信ならず又大切は細謹をかへりみずといふ事あり。命あり時あらば寿命をさらんにて十鈞とのかく一毫に報んはいと易かり。大丈夫たるもの女々しく物思ひせんやと慷激してさく結朝行徳の宿を出てこの日より萬里の客とならんとすれども路費とてく云ふくもなし京鎌倉ハ憚ありて身を立るに不便なり。春徳既に亡びたれども。ろの陸奥の方にてこそ威徳ある武士ハあれいかゞはせんと思ひ決めて武蔵下総の堺なる隅田河の上りに至りける。當下又思ひやう昔ハ母の名代に浅草寺へ詣て観世音に祈りし事の中に世その中其死に似たれども親の枉死をとて祈りし夢中の示現ハ今さらに霊験ありとのべつゝも立よるべく又母のためにこのらしみやと河ばたより観音堂へ参詣し。その日早朝より千束のあたりにこの夜を明らし急ぬ旅も夏の日なれど長けれバ次の日ハ十二四里の路を走りて許我の郷まで来れると見日ハ暮なんとして天結陰りて立の雨さへ降そゝぐ輪の崎といふ所に宿やと見定めて家もあけれバ濡つゝ直と走りしに橋る白屋あるけり。椎枝と雑竹にて店折戸に鳴子を附たり。立よりて憩んとやゝのいそぎて呼門あれバ戸を推開るよりはやく音さへ奥の方より人ありて来つるのハ維と阿三郎ハ縁頬へ隻手をかけて慇懃に其の陸奥の方へとて熟れ旅は蓑もぬれたれバむしろ雨に追はせしかども走り

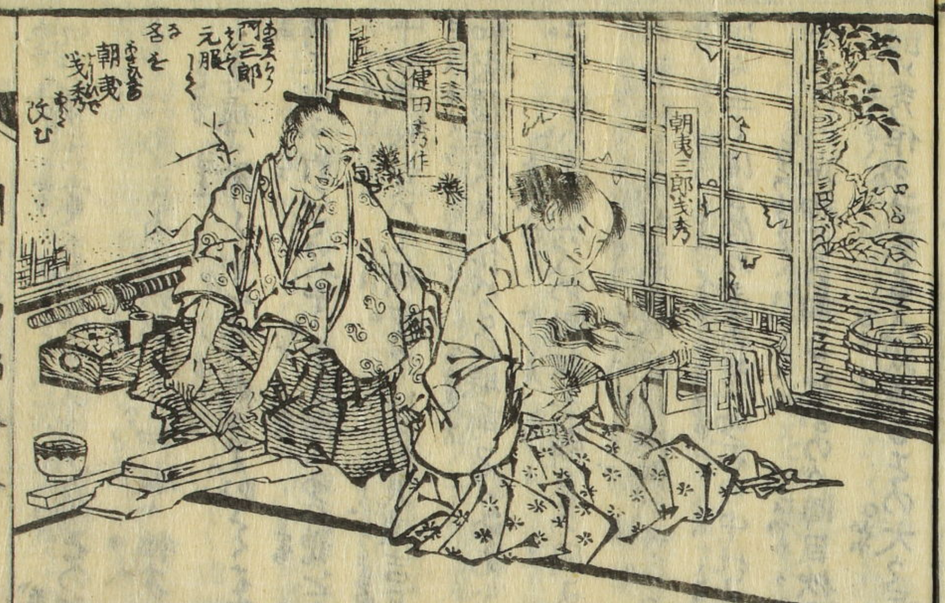
入るまく驚き出ひ死雪時蓋下を貸る人といふはあるべき郎氏起しさそこの不便の
ゆめ夜深しあるべきやいかるべき入り〳〵憩ひ臥とのひて障子を引あけて
迭の面氏うちあハ〳〵阿三郎あらざる狄健田の大人狄とかくいふ。ちのひ
あけどとだのつふるの疑ひハ釋ざるをけり。

初輯第十

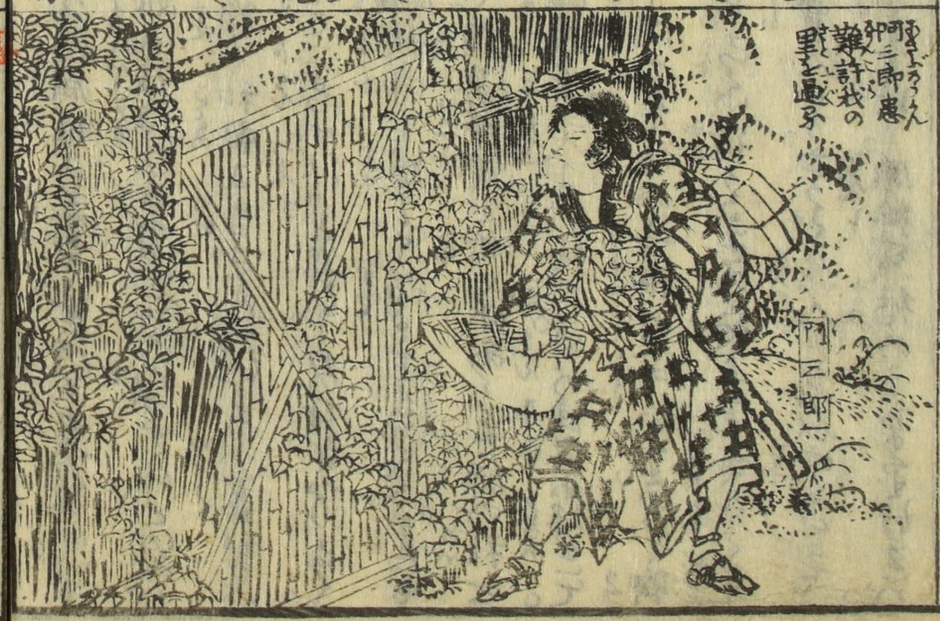
大石山社遺弓　旅宿ゐのぐらの元服

却説健田秀作ハ阿三郎を勧まく草鞋を脱せ母屋ゑ誘引ひぶ夾衣
とりて出く濡ゐる衣と更さと居親切むゐ変ら孫ハ阿三郎ハ憑〳〵熟〳〵
さゐ疲労をおぼえぎるひけゐく差ゐる氏再會を祝〳〵曩ゑ某満禄寺を
辞〳〵去くとのゐと生活ゑ暇ゐ氏のミならず身の賤〳〵ゑ且義くゐく武藝氏
嗜ゐとゐハ親ゆゐ者ゐ世ゐ氏ゐ稽古の会氏断〳〵ゐ〳〵ゐ居ゆを

あゐ孫ゐ面年来疎遠なゐ氏ゐく師ハゐ満禄ゑ差ゐく。ゐ氏ゐと思ひゐ
ゐ居故ゑ彼地を去くゐの比ゐとの処ゑ移住ひゐゐやゐゐ氏ゐ〳〵ひとゐハ
秀作ゐ氏ゐ氏ゐ氏ゐとゐ氏ゐの氏絶く和歌ゑ告ざるひと不審ゐ
ゐ〳〵。先君故副社長費〳〵絶死の後ハ後て二君ゐ仕ゐと思ひしゐ氏ゐ
故朋輩の吹挙ゐよゐゑ朝光のゆ〳〵結城使者を遣〳〵招ゐ氏ゐく。
ゐく辞〳〵さるとゐ主後の義を結〳〵。強て節義を折くゐあゐ師の礼を
ゐく技持せんとゐゐくゐ推辞ゐくて満禄の里入ゑ別氏告件の使者ゐ伴きて
結城の館へ赴死〳〵去歳の春弥生の下浣氏ゐゐゐ吾侍道中よゐゐゐく脚
氏を病ゐゐゐひく。結城まで行ゐ者ゐ。さゐゐ宿ゐゐゐの夜ゐゐ命危く
ゐゐ〳〵敷ゑ彼処ゑ赴死駿馬の骨と毒ゐゐ〳〵ゐ〳〵ゐ死ん。と思ひ決めて
ゐく旅館ゐ留ゐく。ゐゐ〳〵辞〳〵。使者を返〳〵。臨終氏結のゐ者ゐけまべ。



朝光ぬーもさまでハとく伊ちくハ招死
のうちど薬料るど賜ふけんぐ老ぐふ医
療弘加るふ命数いまぐ盡ざりけんかくて
春をぐ三伏の夏果底比やおとてうまく歩
行自由ふろうとうとども官途ハ望ーうう
ぬふ結城へ赴くべうもゆくぐされぐとく
満禄人ふ別弘告ぐ生ろうめ弘安房へ
還俗へ面ぶせぐ只ハいうまでもとの里を死
どろふひべくとうとうく人の古家弘購て
膝弘容ろまふ。ろひとろうとだ。対
もとろうとびいと易くく。ナや暮月ふ



あうまやうり。和殿ハ又何ふの故ふいとを
遠死陸奥へ今忙ーく赴くゆうんと同じんく
冒根うちよきれべ阿三郎ハ些も隠さぐ。
改豊六ハ寛枉ふ墓なく命を隕せーう。
毋ぐ上総のうえ義ーくこぐ勇ハ光弘報ん
とく。仇人の宅地ふ潜び入り。藤堀親子主
従弘。鏖ふーく支ぐろよ弘委細ふ告ー
ぐ。秀作作ゆく嘆賞ー。ゴ三そのそーぐえ
和殿弘相て。畎畝ふ終底人とハ思ろぐど。
勇悍あるうとあう弘ろうぐ言を投く減
しが果くゆる大義を就せり。子ーうとうの

仇を報ずるに賞をべし。その邪正を質しがたし。非理の理を強く吏ずに只あしざるを判断しく和殿が性方を察ねるに且く隠しとく進退決定めず。と真成に愉くしくて舎藏多し。ひくくたや十日あまり理屈ずに有一日健田秀地八河三郎が對ひていふ。世を潜ぶ者八貌と変名を更るかまたしさとでも和殿を十七歳額髮八いと似げるーけ八黄道吉日なるかを和殿の為に元服の祝壽をとべ。和殿復讐の為仇八ゑれ眼前ゑるかあるを待ど勇敢藝術両ゑるを上達をるかあるざるせば主従六人の勍敵を瞬息の間に殺果さんや。加以十日あまり。ゑるを同居の動静云為村長がを成長ゑ微賤の子が肖ざるけ。和殿八實ハ豊八が一子ゑるべ。泥に生く濁に染ぬ蓮の花沙石の中に埋まれるん。ひくく愛ゑる少年を武人の子に せざりしハ造物者の僻る狀ものが僻目狀いるかぞや。どうち或をく同ひーゑべ。所に郎八秀作がさとくも人形識るとの。大ゑるをゑ感佩しく忽地かをゑ師ゑる河

親のごとしとゑり。況やゑるを信をるく吾を愛をるとの義かを何哀をゑ隠をゑ死明く地に告ぐを。と腹裏かを尋思しく。義を勇かを把ゑ師八寛に識量卓ーく某かを親あるくをゑ名告るを面ゑ死ゑるかゑ。ゑるを問ゑるとの殺ゑるをく。匿果ん八罪を思ゑ。安ん八後四位伊豫守九將軍義仲ん実母八中三條兼遠が愛女世かを。ゑを勇猛剛絵ん某母の胎内ゑあるとゑるを又八討ゑるく和田義盛が子と生をゑる。二才かを虎ゑるを共猟倉かをひーゑ。箇様ゑこのゑるかゑより母親剛絵八刀かを伏ーく某八乳母ゑる桑母かを抱ゑるく。そゑ舊里八彼ゑ乳母夫婦を親に ゑるく村落ゑ生育八実の親も又別に養ゑあるとん殺ゑるく。ゑるを初ゑる師八いちはやく相ーゑるく由緒ありをべくやゑとて問かを。ゑとこ遍に及べり聰察睿悟いくべくの人ゑるをゑ言豈ゑるかを及んや感ずをかを。ゑるかあるゑあり。かをゑん此度の厄難ゑ。ゑを後難をゑるを。ゑを親子ゑるを。

海陸に分て夫々に殺害せんと企て母葉子を真成が実母の遺言云々と告て素姓を
境示し過去現在の親の記念この三種を遮与せしが嘸嘸後悔あるべきが
憤激して立地に表成改名して義を立て勇ましく夫々養父の仇人成敗せんとと
霜が如し決して名を行て世の夜眼代糖
堀が怨あるの成敗して嬰襁より養育せし親の恩に報雪めて志を致し
たりと且つ疑念成釋の人といひ鮫を懐き旗指を立て俱利迦羅の
太刀を共に佩び置て世の人皆秀衡類と嗤嘆して席次更め礼儀正しく良
将勇士の風あり世の人皆あらそひ旗櫃の二巻より芳しき裏木が
秀衡鳳の卵の中よりその声聞ゆるが如く見るのみ
似げなく成和殿成年来研究し疑念の氷解せし木曽殿の清和皇
別古今独歩の良将と惜て終に成よくせざる功が強て君臣の義を立て狼藉

陳限なく迫て竟が滅亡あるのひ死のはが今その子孫を京鎌倉へ召えるが孫
伐踵を旋さべくなど譬へ冠者義高仲の幼孫鎌倉殿の婿男の如
曽殿亡びの後い程もなく義高入間川へ殺害せしとても私の
義成を孫く扶ける理非をもこの時遠成をもとびおのが勇悍血気が無して
治まる世成乱さんとやうの八幽賊へ
分別せざるを木曽が為倒とひ絞さが禍の道成みづから刺くく怒慎を
なくして彼養父義盛主の極武の皇別坂東の八平氏の隨一なる祖父三浦介義
明鎌倉殿のおんなる老命を擲ちて世の人の為ところその忠信義嗣が
子も又孫の貳こそなく鎌倉殿に仕まる軍功も亦莫大なるに義盛が
こそ左衛門尉に補せられて侍所の別當に任成親とくくまづ彼を
君とくく不義なるもと今こそかくあるとも時を待べ推参しく義盛が再

會ー若義之人皆うちあのべと吁嗟お諭まるあん門三郎うち笑ひよりまたく感謝ま
姫ぎ実の母ら遺言もこのうのふいつ実又の人八一生涯口外まべうもゆるひどこ三年の
疎遠就答のいぎ後難とも憚らく愛あるまるせの人ろ尚師ゆ八何でふ隠ぎ死。
とぎひまりらぎ恥ぎの死物ひくるま就つろまるぬ今よるまみぎうう誓く外へち
渡しいらどといろよ秀他ちち点ぎ微ぬくまろるるひめけり。靭絵の君八さふもも
いろぎ豊六夫婦ら心操世の田夫山妻ゆ八又有ひくぎ死ちちち尚べー。さてゆ要ろう死
司答ゆぎろぎ時就稼ーたまれ元服ゆ八式あるまて加冠理髪友の人を撰ま唐
山ぎ三の日よるまと字まとのうとあり。ろぎ図ゆも亦名を定む和殿八ニ直らゆまろ
ゆいろーく世就者のぶるるまべ只速丈夫まるるーく足ちん小盥ま湯を汲てま。
いぎ制ぎ死進せんといひろく躍ーく立あぎるーく棚の隅ゆまと砥を取ゆ刀制刀を
合せるのどまれべ門三郎八坐と占て額髪就撮出ー。推濡ーく者八弱ゆ秀他八後ま

立ーく。ぎぎゆまとりまぎ利ぎ死髪結果ーく。武拭ひ前ゆついゆーく。どんゆりるを遺丈武ゆ
ろるるゆまるるまーく。と祝ままべ門三郎ゆ盥の湯とり人頼ま。ぎてうーーんて茶
ぎく恩就謝ー。既ま形就改ぎれどものまぎ名就更めどゆとる名告いろんと問秀作
他吟ー実又の木曽八憚ゆまを和田をりく苗字とせん狩三浦をりて苗字とせん狩
吸べうう握ぎ弦とのうまーく霊時就就傾け乗ぎれー光の勘乱ゆまる後親乃
苗字を續んと嗚呼ぎる所るまゆ八どや。安房ゆーく人まるるまーべ。ぎて郡の名と
取ーく朝夷を苗字とせん狩某彼処を去ぎるまを就ーけの不動ゆ祈念ーく。
一郡の主とものるべこまうしーく。この地を領せん。さるとを八ぎひの隨ま堂宇を
修復ーせらんと誓ひーるゆ也べ此彼ゆーく朝夷と唱まゆーーく思ふちり今
恩意就ーく定ぎまま実又八義仲養ぎ八義盛共ま諱ゆ義の字あるまゆーーべ
霸ま一字を表ーく。朝夷三郎義秀と名告ゆぎまとりゆ秀他ゆまぎうちを矣。

そハ一段まさるべし秀の字ハ世ひあらとオ秀ぐれハ為を立ぬよりうく運秀ぐれハ
遠ざかるとハ又義ハ勇の就る所言も義ハあらざれハ行ハに
義秀れハ名も又秀ぐ名秀れハ人服をこ豪傑勇士とハ
義秀の二字究めく愛さ又朝夷ハ明野よりの上ハ朝廷下ハ草野
と名まこもその名称揚る祥とやいかん賀とべ賀とべと稱ぐ門と郎
こぐ師の賞美甚過ると秀の字ハ師の字を象ものとハ顔ハ鎌倉
さこの日ハ朝夷義秀と名告名ハ安房上総ハ月毎
乾魚貢ハ高旅ハ大蒲の鎌倉へ則領主御厨五
郎満祿信俊ハ彼地ハ下向く莊司村長里人ハ召集合顔末ハ
正を質理非を判断を黒ハ藤堀ハ奪ハ奸曲をく露顕せ
ハ義秀の上総ハ守へ

私ハ意張ハ涙く眼代を駆る外ハ民数帳の名簿を削ぬり立ぬ推と
置く速ハ速ハとて村長ハ村長ハ称ぐ絆ハ異ハ
物ぐとぐ秀ハ編ハ絞ぐ能く伴の麹を義秀ハ告ぐ世ハ
人ハ達せるどれども田舎ハ言葉ハ解ぬ明ても暮ても師才両人ハ兵書を
講く古人の得失を討論又ハ太刀を合せ的を射ぬ
移ハ年暮て春ハ紅梅ハ衣更ハ上洛ハ
御気再発く病苦ハ危く義秀ハ憂ひて良医を
募ハ薬餌を与ハ看病者周ぐ
世ハ慰ぐく少ひん有一日ハ女子の顔を揉く義秀ハ
上総ハ又安房ハ存し日ハ子ハ
ハ皮膚を骨を
ハ和歌只一人れども今ハ怨ハ

取せんとすつゝ、ゆくすえ死過世あり。恩養の恩老い今茲六十八歳妻い
先さきに子もうせ、たゞ惜けくもあらぬ齢なれども、いつまでか世に貪るべき。されば死るぞ
和殿又この地ゆゑ、留るべうぞ。下野国足利なる学校の学頭、坂長老い安
達盛長ぬしの子なりとぞ。治兼の年間古主の後ひ藤倉へ帰りしとぞ。一面の
識あり。今に至く年あまり絶く音問せざりしに、彼長老い儒仏の碩学、その性
温順にして客を愛せり。和殿武藝に熟しとのゝ文道にうとし。足ざる欲且く
彼ぬし為を寓して学ひて禄をもちゆ。彼足利なる学校い参議小野皇朝臣
さね老くして建学とゆ。皇い永見の孫、岑守の子なり。弘仁十三年文章
生なり。天長元年巡察使弾正なり。頻に進く参議に叙せり。当時の博物宏才なり。
世のつゝく文殊の化身とゆ。皇巡察使なりしとき、孔子の像を置く。春秋に祀り。諸生をして学ひ世ぐるとて

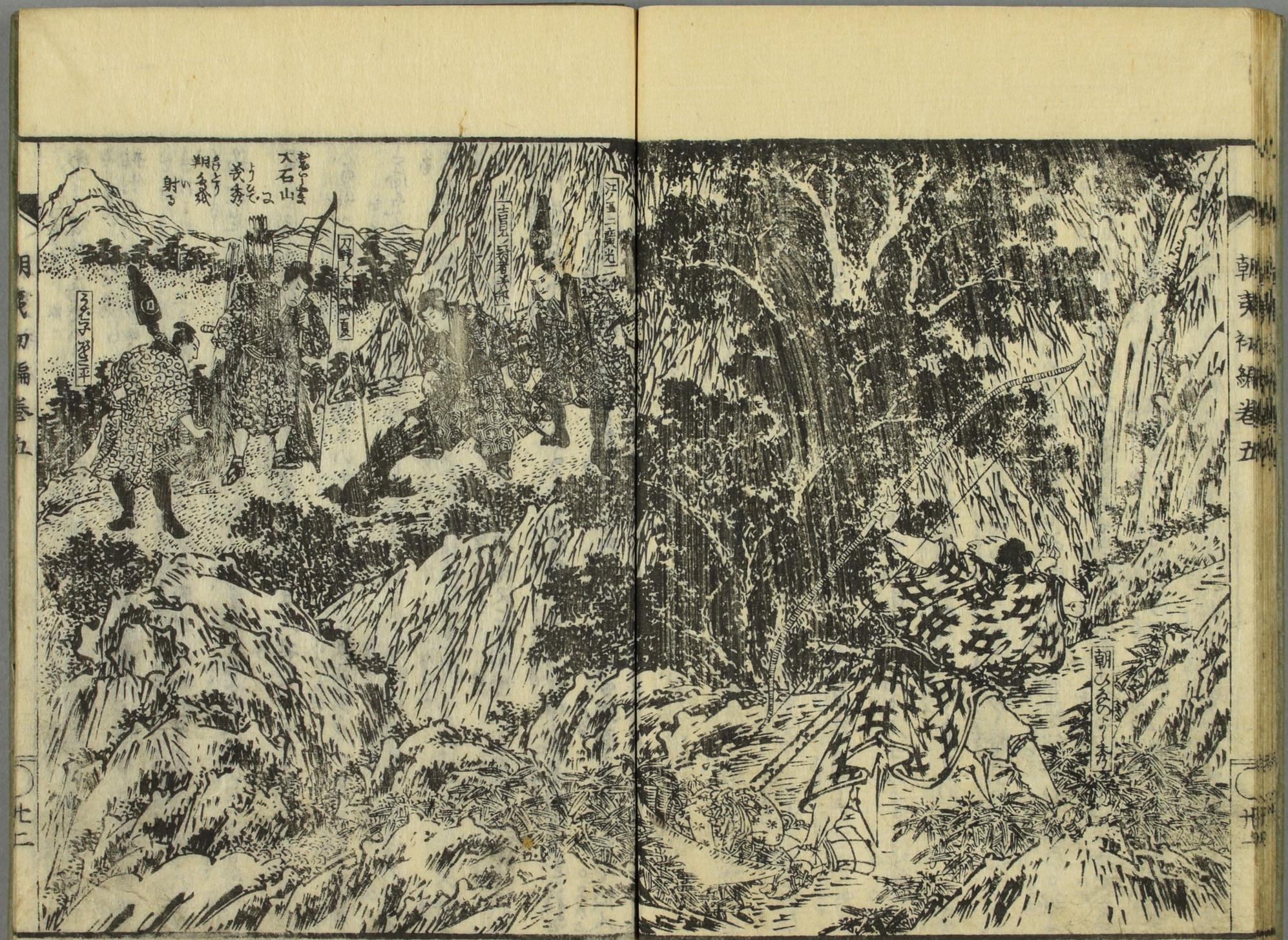
学校廃れ下野に、明堂を守るの儒生いと多くなりぬ。法師を
入れて学ばせ則ち武守とせり。近ろ足利義兼ぬし、堂社を再興せり。
明堂昔に立ち、繁昌せり。今和殿の才をもて、橋本彼に勤
学ばせば、文武両道成就し。遂に志願を達んと。絶く疑ひなし。
とゆ。今の世の人ら、笑の中に刀を隠せば、身の慎とて肝要なり。時運に摘ひ
撰ばあらく、重用せらるゝとあるとも、君の寵もとのむべくもなし。つゝぶ責を負ひ
べくとゝ。功成名遂て退くべし。後に必悔なしとあり。譬ばつゝぶ古主の遺業の如く
倉創業の功臣なりとても、絶者のなる弾ぜく。忽地滅きのひふけり。かくく
如殿、常亡ひ、死上恩国一宮の神主兼重ぬ。藤倉殿へ参りて云。故攻廣常存
生の時、宿願の旨あるとて、納甲一領、今この宝殿に有。と下祢宜ありて
所ぬ頼朝卿、分りの為に藤判官代邦通と一品坊を遣く件の甲をとりて

御覧ぜらるゝに高綱が結句さる一封の書状あり。掠くに鎌倉殿の御ことばゆゑ武
運永祈る願書と祈願の趣真成に三ヶ條戒書載て治暦六年七月日。上総權介平朝
臣貞常と自筆にかく写せり。ゆゑに驚せるひろ原来廣常逆心ありしと悔し
くも疑ひくゆるせりとよと憐らひもひくゆ殿の諸侍天羽庄司直胤ぬし相馬九郎
常清ぬしに縁坐よりて囚人となりて武石出羽に厚免せられ武郎
座が仰下さるゝを見れば去る寿永三年正月十七日のつゆ消なんこの後建久四年の
秋蒲殿縊頼が死を賜しとも広後悔あるとて秋の月をあやまりて醫師が
病症を珍損ぐく人を殺さるゝ酷し。名将とうかゝめ如し。暗君庸主さぞあらん。
功名の下ゆゑ久しく居べうびとぞ大文種を燻ぶるゝ范蠡が辭たるとかうさぞや。
生涯ある懸念くく終り武慎とのひねと叮嚀に教訓し病苦を忍びくゆ均長老へ
紹介の書状を写せり。朝夷が遠寄せ武秀が賦術に憐ぶ慰くく扶けさて。

真成が音病をかくくて五六日を経ぬ秀化はいとく哀く終よりもなくくろのほしべ。
武秀は哀悼して親を喪ふ心地とあれどさてあるべきにあらざるに里人武相潭ひ。
許我より程も遠からぬ真中の野寺（今は南中上書許我を）に葬る。初七日果て次の日は
秀作が衣裳はさらるゝに家武さへ舎くてとく香華の料が寺へ布施しこそ武
半銭も貯へも里人が別に武告つ。足利武授く起紙せるに時は弥生のなかゆく。
山は翠がいろくの花彼びく霞ふく。水は破りてさゆくの鳥囀ずとく風暖く行人も
馬上が睡る農夫は畝に憩ひ家内種を浸し門は業武摘む人のさゝろの長閑くく旅
かりそ死ぬるとも親のうとく社ひとひとて楽くもあらぬ歌ゆゑ。詩ゆも賦も
名所古蹟に心とまるゝで日が暮れ夜は宿に辛苦く下野なる足利に学ぶけるに学校に
赴武く均長老を尋ねに彼長老は迂化とて三年ぶの居とのふ武秀は又さらるゝ
さるゝ武失ひくいふせほとゝひとびく。委細に尋ねべ留学の緒は答く。

只今の学問は真言密宗の碩学なる理真上人めくとゝ〜まゐ筠長老の
親族い鎌倉ゆゝをあまと仰せけ。あるゆゝさ者人もあり。常細〜紙にしたゝ
るゝが宇吉見といふ地方ゆ研者美邦といふ郷士あまとい長老の者子めく。
菩縁あるよ〜ゆゝをとり。其紙よゆ色紙く問ねしき紙書るとまらゞ道乃
行ゆめ此ゝと。と叮嚀ま示せ〜ゞ美秀はその人ふ欲〜ゆよ紙述く吉見の
ゝ〜人起ゆ。ゆとるをつゝく〜ゆの年。筠長老ゝくまとゆ。そゞ由縁の人といふ
とも先師の紹牧経ゆ紙ま似ゝり。さとゞとく今夏ま投ゝくいめん処をなゝ。
且紙ま被郷士を訪ゞや。とゆゝ〜ゞ件の緒生ゞ海〜隨ま美邦の宿所を雷て。
外面ゆを瞻仰ゆま。衡門紙真中ゆ出をゝく左右へ竹邑締繞〜ゝ構乃宅
地ゝるを進を入ゝ〜又ゝるゆ垣の内ゝゆ穀瀑あり。柴小屋あり。奥ゆを書院と
ゆ〜紙ゆ客舎と仰ゞ紙茅茸ゆ造ゆを。ま田舎ゆをいと愛を。躰く

門ゞ小廝ゆく。雑と問ゆ美秀云云のゝ紙告ゆま小廝ゞいふゆ主人ゆ友ゞゆ
後引を今朝未明ゝゝを大石山へ翔ゝ紙射ゆゆ暮を紙ゆ選ゝべゝもゆゝゞ。
り對面せんとゝゝゞ翌又某ゆ〜とゆゝ美秀ゆゝく。原来幸ゝ〜又来ゝゝゆとゆひ
ゆゝく外面へ退紙ゝく門辺ま立ゝく。空ゝゝ仰紙日ゆゝゝゞ卓紙ま翌と契りて外ま
宿を求んゝゝを。ゝを被紙ゆ拉ゆ紙ゞゆ美邦ゆゆゝゝゆゝん。さゝとく道紙人ゆ
向ゆ大石山へ登ゝく。麓の小舎ま火縄を購ゆ。おゞつゝなくゝゝまけ入ゞゆゝゆ當
囲の高峯なり羊陽ゝゝゆ山又山樵夫炭焼ゆゞ通ゆ路。ゝく僥ゆゝゆゆ迷ゝれく。
何紙ゝ〜ゝく彼人ま。あゞゞ〜ゝゆ美ゝゝゝゝゝゝゝゆ。ゝゞゞ勉ゝく登ゞゆ彷ゆゝと坦ゝゝる紙ま
来ゝゝゝの四辺美生ゆ〜く。左ゞゆ岡ゆゝゞ。岡の辺ま焼捨ゝゞゆ火ゝゝる
灰ゆゝゝゝゝゝゞゆ傷の松ま滋藤の弓を倚ゞ。その下ゆ獵矢一條ありゝゝまを取揚て
ゝゝ紙ゝゝゝゆ水煤〜ゝく刀野時夏と字〜ゝゝまゝゝゝゝゆ必彼輩ゞ遺ゝゝゞゆのゆゞ


朝ひらの大石山
義秀
射る
朝ひらの義秀

あらん焼捨てんと欲ス人ハさくなきなり。この弓箭弦ハ推量なる相去なきとき。初對面の牽出物なりとも又ハ弦射て必の高弦屋ん。と和とるこごちく弓箭を挾て相を向上く徘徊せり。ちく又吉見冠者義邦ハ年来陵ゑ世られる。筠長老なくるとても文武の学問懈らぎとちく学校へいあるく會流持地なりとなるとも刀野太郎時夏と隣弦まぐ和いるとき〻くなり。ちれど巣が亡又照時ゑ母君幡太の方ハ新れあると成ゑ仏なるのあるとぐ。ちち鮮と成乱色ハなくく遠離んとのミ志のハ〻ハ生憎ハ時夏と結吉の日を共ハせ〻ぐ困ぐ果ていっとなく学校へ赴弦ゐるぐ廣光ゑ弦研ゑて。その懈を遣〻ぐ義邦ハ癖の類ハ此ことと告るゑ廣光又ゑ弦練ゆく。刀野ハ浮浪人ゑれだ執権時政ぬ〻ハ所縁あるゑ成ゑ。當國の守義兼ぬも等閑ゑくぎとれと扶持〻く客分と稱ら成。ちるハ君ぐちろハ是く。いるも強面ゑとゑ成ゑ彼人

必恨を含んこそ禍胎ハ雙へその子ハ及さぐとハ本丈あるハゆるぎゑ成ハ
丈ゑるゑ人とゑちく。諭〻まるせ〻ハ義邦ハ有理とあぐ〻く又学校ゑ交加つ。
時夏ハ會毎ゑさりげなくのこるぐ〻早晩友垣結ゑそこの日丈石山の小き将ハ
誘ひ出さるとゑひハゑ義邦ハけの拉山弦鬱悒ゑひのゑとも賜ゑ〻ゑ路
なけるぐ義者ハ宿の惟光なる成ハ一ハ弓箭をゑ〻ゑく小厮ハ割篭と拉擔せ
未明ゑるゑ出るひぬゑ〻ゑ〻ハ時夏ハ懷刀行騰弓箭まぐいと華ゑるゑ成寸
拗〻く。温子井平といふ若党ハ替弓ゑ丈ゑるゑ成ゑ。奴隷四五人列率十人弦前ゑ
立〻後ハ従ハ義邦と推並ゑ。件のゑゑ赴ゑん。彼首ハ立彼れゑ求穢るハさる獲ハ
おぐなくく日ハ生や斜ゑるゑるハけゑ時夏素ゑゑ賭を好めぐ豫て義邦ハ約ゑる
ゑ。ゑゑ和君ハ先ちちくゑ成ゑ弦射て落ぐ布十丈弦牽ゑるへ和君の〻先
たちくゑ成ゑ弦射て落ぐ布十丈弦牽ゑるへ和君の〻先
丈進ぶせんこのゑ違乱ゑぐゑと豫てゑゑ

定しが美邪貪るところの事ぞ恥なるこそ是らの身に此由懸念あるのみ時
夏へハふかひろくてこれハ射るとも射る毎に化箭のうらゆく物が獲ど却若黨等
平ら山桧二三隻射落しが時夏まもなく焦燥こゝの箭ハころして弓もとりしと
科が弓箭に負せつゝ弓を贊組がかへて彼此となく徘徊せし浩然小野雞
一隻列来つゝ追ふて叢よりたちて立しが夏やと矢をつぎ播緒へ時夏義
邪推並くよしつ引固て彈ど射る。去れども美邪ハ是しかとあてゝ射ても中るが時
夏義て必恨ん譲ぞや。とおぼせしが寛を外しあひけりそのかひもなく時夏が
射るに箭ハのく翦ならくるゆへ間まなりしに野雞ハたちまち地に落たり。裏
皆少と聲散動らく落居とひかく件の野雞を引捕りて来るが時夏と遠
あく島にふちて箭がとらへかゝへて満面の笑が含ミ吉見生一とこそいへ贈ゆる
某勝に言へ矢柄につゝの名が記しくおもえが紛べうもあらざりけり。ちかごろいひしと

誇貞に箭が抜とられとき居ぞ前面の樹蔭よりして声高く且くその箭を抜とりし
あなる野雞のゆゑへとりにかゝると禁らるく樹間を出る人あり皆まなかと見とれ居たり。
その人身長六尺あまりて眼ハ清く眉秀筋骨逞しく年の頃ハ少なるが姿貌ハ要
ありても人品骨相賤しからず袴の甲掛脚半にて両刀を腰に帯しは滋藤の弓をもてり。
との人ハ是別人ならず朝夷三郎義秀なりし畢竟義秀が出くハ会して又いかなる
物語かあるや。その巻を更條を改め第二輯の首にとかなん抑義秀の傳初中後あり
この嶋めぐりに至てハ物がたりハ長からず年が積巻をかさねるもまだく剞劂氏を
労すことあらざれバ全本となりぬ。じ曩ハ畧長篇に張月又今茲著せし八犬
士傳の類なれバ敢請四方の看官等を結ぶのまでに倦ざるべくしと毎に嗣出
すが僕ねがく高評がなへらし。

朝夷巡嶋記全傳巻之五　終

編述 曲亭馬琴稿本

浄書 蓐土 千形仲道謄寫

出像 一柳齋豐廣畫

剞劂 華洛 井上治兵衛刀

文化十二年乙亥

筆福硯壽大吉利市

繡梓書肆

江戸馬喰町三丁目 若林清兵衛

筋違御門外神田平永町 山崎平八

大坂齋橋唐物町南入 河内屋太助

春正月吉日 發販

○曲亭新編繪入草紙物かたり畧目 浪華 文金堂藏板

朝夷巡嶋記 初輯五巻刊行 豐廣画

この書は本房の彫板鎌倉九代記鎌倉実記鎌倉新紀ふまえて朝夷の事迹あるを元ゐとして刊行をとゝのふる事は俗者の新趣向ふ出さるを耶もかつて歩のく新を編るものゆえ

第二輯五巻嗣出

南総里見八犬傳 肇編五巻 柳川画 二編三編引つゞき発出

月氷奇縁 全入 五冊

新累解脱物語 右と同 北齋画 全五冊

昔語質屋庫 古書俗説のあるまゝ或平仮名とゝのふ奥じるる草紙

松染情史秋七草 全入 豐廣画 全五冊

燕石雑志 隨筆のゝ古書をうあるまゝ正しくみつくるの考とのまゝ 全五冊

俳諧歳時記 云ふ俗説のまゝ 全二冊

○馬琴画賛扇 神女湯まゐり丸つ死虫の妙薬ふ私ゑ世ゆく 并に神田ふ町柏屋ゑ売ふもあり